

マルメライザーと呼ばれる回転窯で吸着材の製法を解説する大木武彦さん。



節電シート「カーボンウェーブ」。

**DATA**  
 代表者/大木 武彦  
 住所/大津市中野三丁目4-13  
 TEL/077-549-1309  
 Web/http://ohki-techno.com/  
 事業内容/炭素研究開発・技術商社

炭素技術を軸に幅広い分野で製品を開発する同社。社業の原点には社長の「大木武彦さんの豊かな発想力がある。たとえば「炭素の断熱・蓄熱効果を建材に」と製品化されたのが炭素節電シート「カーボンウェーブ」。開発のさなかに震災が起こり、同年11月に完成したシートは販売会社の手を経て仮設住宅に配られた。

既製品の提供による支援の一方で、大木さんが力を入れたのが原発問題の解決に寄与する技術。「最初に弊社の特許技術『壁面意匠再生工法』の応用を思い付きました。壁面の汚れをバック形式で吸着成分であるゼオライトやプルシアンブルーを入れることで除去ができる」と。さ

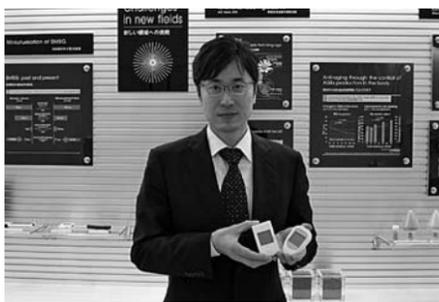
株式会社大木工藝

画期的発想で放射線物質の除染に大きな一歩。

技術提供・開発を通じた復興支援



被災地で活用した支援機器。



長谷川誉人と、供給した医療機器の一部。

**DATA**  
 代表者/松田 猛  
 住所/京・中央区島丸通四上ル第689京都御幸ビル10F  
 TEL/050-5527-9301  
 Web/http://www.arkray.co.jp/  
 事業内容/生化学分析機器販売

医療機器メーカーのアークレイ株式会社は、阪神大震災時、インフラが壊滅した街を営業員自ら機器や試薬を背負ってバイクで奔走したという。そんな現場を体験した人間がいたことが、今回の迅速な対応にも生かされた。営業管理部に本部を設置したのは震災翌朝。その夜には臨床検査機器や試薬、血糖自己測定機器などを積んだチャーター便を仙台営業所に向かわせた。「この事態に何が必要か、初動がいかに大切かを知るスタッフが助けられました」と後方支援を担当した長谷川誉人さんが回想する。

仙台営業所はそのまま現地のサポート窓口。全国の営業所から駆けつけたスタッフが、不眠不休状態で支援活動をフロアした。同時に災害派遣医療チームや関連学会、滋賀県をはじめとする地方の行政とも連携して、支援を必要としている団体や施設に医療物資を供給。非常時対応に徹した対策本部は1カ月で解散したが、その後も専用窓口を置いてのサポートは続く。特に同社の医療機器の特徴である水なしで検査ができるドライケミストリー技術は、非常に重宝されているという。

アークレイ株式会社

すぐれた機動力で被災地の診療体制確立に貢献。

復興 京都から元気を東北へ 京都企業の復興支援活動

シリーズ 第2回

平成23年3月11日の東日本大震災から1年が経過。この間、全国の企業や自治体、一般市民から、被災地にさまざまな形の支援が寄せられました。前回から3回シリーズの予定で、積極的に復旧・復興支援に携わった本所会員企業の取り組みを紹介し、今後の中長期的な復興への関わり方を考える機会としたいと思います。



「元気日本!! 関西ベンチャーの会」トップページ。



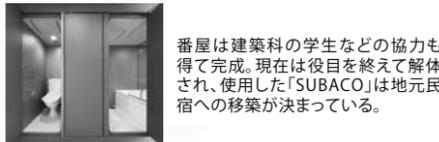
ご紹介した以外にもさまざまな支援活動を行う 谷孝 大さん(右)、関西ベンチャーの会で実務を担当する 北川 龍(左)さん。

**DATA**  
 代表者/谷孝 大  
 住所/京・下京区中堂寺栗田町91京都駅前一丁目9号館7F  
 TEL/075-326-3700  
 Web/http://www.future-s.com/index.html  
 事業内容/ASP・SaaS事業、ネットワークソリューション事業・Webプロデュース事業

レンタルサーバー事業を手がける同社の代表取締役、谷孝大さんは神戸市出身。阪神大震災で故郷の変貌を目の当たりにしたのは17歳の時だった。「それだけに被災地の力になりたいという強い思いがこみあげて」。すぐに社内で検討し被災地に向けたレンタルサーバーの無償提供を開始。グループ企業でも、各々の主業を生かしたサービスの無償提供に踏み切った。

さらに4月には、共同発起人企業の一社として、関西に本社を置くベンチャー企業を連携させた「元気日本!! 関西ベンチャーの会」を設立。各社の支援事業をまとめたホームページを開設し、距離を超えた支援情報を発信した。「みんなの熱い思いを一本化し、ひとつのウェブサイトで広報することで伝達力を高めたかった」という狙いは功を奏し、最終的には16の企業・団体が参加。たとえば被災者が失った思い出の写真を卒業アルバムなどから探すマッチングサイト「おもいでさがし」など、大きな反響を呼んだサービスも生まれた。

連携・コラボによる復興支援



番屋は建築科の学生などの協力も得て完成。現在は役目を終えて解体され、使用した「SUBACO」は地元民宿への移築が決まっている。



仕事でのパートナーシップが今回の支援活動にもつながった松本正さん(左)と西田隆一(右)さん。

**DATA**  
 代表者/西田 隆一  
 住所/京・伏見区横大路本町7  
 TEL/075-611-1228  
 Web/http://www.wako-ss.co.jp/  
 事業内容/鍍金・ステンレス製機器加工業

「仮設住宅は最終的に廃棄物になるという阪神大震災の反省のもと、今思いついたのが短期間で設置でき移設も容易なバスキッチンユニット『SUBACO(スバコ)』の活用です」と語るのは、西京建築研究機関の代表、松本正さん。SUBACOは住宅設備機器の開発製造を手がける(株)和光製作所との共同開発商品。同社の西田隆一社長も「当社でも事業を生かした支援を望んでいましたので、即座にお話を受けました」とうなずく。

松本さんはこの建築関係の有志による復興支援プロジェクトを「京援隊」と名づけ活動。第一弾として南三陸町志津川の漁協の要請に応え、仮設の番屋建築を手がけた。完成したのは震災の3カ月後。まだ瓦礫の残る港の前にいち早く整った施設は、漁業復興への大きなモチベーションとなった。その後も京援隊の活動は地道に継続し、望まれる場所に望まれる施設建築を支援している。松本さんの報告に、「設備提供をしてあとはお任せするばかりでしたが、それでもこうしてお話を伺うと嬉しいですね」と西田さんも顔をほころばせる。

被災地への共感を原動力に、支援への思いを束ねる。

株式会社フューチャースピリッツ

建築分野のコラボで被災地の自立をサポート。

京援隊(株式会社和光製作所)